

## コーパスにおける「たぶん」「おそらく」の使用傾向の分析

前坊 香菜子

### 要旨

本稿では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における「たぶん」「おそらく」の出現傾向を調査した。また、2語が出現する文章についての調査を行い、その使用傾向を明らかにした。調査の結果、「たぶん」7589例、「おそらく」7846例が採取され、100万語あたりの頻度に換算すると約70語と、同程度の出現であった。しかし、出現するサブコーパスには偏りがあり、「たぶん」は「知恵袋」「ブログ」の出現が多く、「おそらく」は「国会会議録」での出現が最も多く、次いで「書籍」「教科書」「韻文」であった。「書籍」では、「0.総記」「9.文学」を除き、「おそらく」のほうが多く出現していた。また、2語が使用されている文章を分析した結果、「たぶん」は、会話や対談、モノロギ的な文章、人の行為、体験など日常的な話題についての主観的な推量に多く使用されていた。一方、「おそらく」は、解説文、論説文に多く、ある事象について客観的に記述された推量に使用されていることが明らかになった。

キーワード：語の文体的特徴 類義語 レジスター ジャンル コーパス

### 1. はじめに

日本語学習者の作文には語彙・文法・構文などにおいて改善すべき様々な問題がみられる。特に文体に合った語や表現の選択は、上級になっても困難な課題であることが多い。その例として、話しことばや書きことばの混在、レポートなど客観的に書くことが求められる文章に主観的な表現が現れることなどを挙げるができる（高橋 2008）。

このような課題を解決するためには、語の文体的特徴（宮島 1977）を明らかにすることが必要である。そのためにはまず、文章を分類する必要があるが、さまざまな要素が複雑に関係しており、容易に分類することは難しい。しかし、一つの試みとして、副詞と文末表現をマーカーとして客観的に書かれた文章か主観的に書かれた文章かという特徴を捉えて分類したものがある（前坊 2011）。そこでは、時事評論には書き手の態度を表明する陳述副詞が多く出現することが明らかになっている。そして、一般的に話し言葉的、書き言葉的といわれている語が同一文章中に出現していた。時事評論という比較的硬い内容の文章で両者が使用されているということは、話し言葉的、書き言葉的、硬い文、柔らかい文という指標だけではない、語の文体的特徴があると考えられる。

本調査では、書き手の推量のモダリティと共に起する「たぶん」「おそらく」を一例として、この類義語の使用傾向を明らかにするため『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJ）におけるサブコーパスごとの出現分布の違いを調査する。また、2語が出現する文章のジャンル、文末文体、また、どのような文に使用されているのかを明らかにする。

## 2. 先行研究

### 2.1 「たぶん」「おそらく」の辞書記述

「たぶん」「おそらく」について以下のような記述がある。

『現代副詞用法辞典』(2003)

「たぶん」 可能性が高いことを推量する様子を表す。(中略) しばしば推量の表現を伴う。(中略) ただし、話者の主観に基づく可能性の推量を表し、客観的な根拠は暗示しない。(中略) 「おそらく」はややかたい文章語であらたまった事柄について「たぶん」より高い可能性での推量を表し、結果に対する危惧や疑問の暗示が伴う。

「おそらく」 可能性の高いことを推量する様子を表す。ややマイナス表現よりのイメージの語。(中略) 述語部分には推量の表現を伴うことが多い。ややかたい文章語で、あらたまった会話などでは「たぶん」のかわりに用いられることも多い。好ましい事柄の可能性を推量する場合には、ふつう「たぶん」「きっと」などを用いる。(中略) いずれも主観的な根拠に基づく可能性の推量。

『日本語語感の辞典』(2011)

「たぶん」 会話やさほど改まらない文章で用いられる日常の漢語

「おそらく」 やや改まった会話や文章で用いられる、少し硬い感じの和語

上記の記述をまとめると、以下のようになる。

「たぶん」 話者の主観的な判断に基づく推量の気持ちを表す。会話やさほど改まらない文章で使われる日常の語。好ましい事柄の推量に用いられる。

「おそらく」 話者の主観的な判断にもとづく推量の気持ちを表す。やや改まった場で使われる少し硬い文章語。「たぶん」よりも高い可能性の推量。危惧や疑問の暗示も表される。

この記述では、実際に具体的にどのような文章で使用されるのかということまではわからない。「たぶん」が使われる「さほど改まらない文章」、「おそらく」が使われる「やや改まった文章」とはどのような文章なのか、実際の用例から明らかにする必要がある。

### 2.2 文章の文体とジャンル、レジスター

『新版日本語教育事典』によると、「文体」とは「文章の表現上の性格を他と対比的に捉えた特殊性のこと」であり、「個性的文体」と「類型的文体」とに大別されると述べられている。「個性的文体」とは、「漱石の文体」や「源氏物語の文体」のように特定の作家や作品の言語表現の個性的な特徴を指している。それに対して、「類型的文体」とは、「言語表現か何らかの観点から類型的に捉えた特徴」を指しており、①語彙・語法(文語体・口語

体、ですます体・だ体・である体など) ②文章のジャンル(手紙の文体、新聞の文体、論説の文体、広告の文体など)、③修辞(散文体、韻文体、<sup>しろくべんれいたい</sup>四六駢儷体など)、という3つの観点からとらえたものである。

また、文章には、かたい文章、やわらかい文章、主観的な文章、客観的な文章など、異なる印象を与えるものがある。柏野・奥村(2012)では、文章の分類指標として「対象読者(難易)、主観的・客観的、硬軟、丁寧さ、直接的な語り性の有無」という5つを挙げ、文章を分類している。本稿ではこれらの特徴も文章の文体を形成するものとする。

文章のジャンルの分類基準として、形態、文体、構造などの「形式的な分類」、文章を表現の素材、表現の対象によって分類する「内容的な分類」、文章の具体的な機能という観点からの「機能的な分類」の3つの基準がある(林1977)。

また、言語には、使用される場やコミュニケーションの目的などによって生じるテキストの変種が存在する。それをレジスターと言うが、ホドシチュク他(2010)は、伝達目的というレジスターからBCCWJのサブコーパスを分類している。そこでは、「総合目的(述べる・報告・解説・伝達・説明・娯乐的など)」「特定目的(情報の要約・方法の記述・結果の提示など)」「事実性(事実・意見・思索・創作など)」「立場・態度の表明(認識・態度・立場の有無など)」という4つの分類がされている。

以上のような指標は、宮島(1972)が「単語の文体」とは「文章全体としての文体をなりたさせるような、個々の単語の持っている特徴のこと」と述べているように、語の文体的特徴を知る上で欠かせないものである。

### 3. 調査の概要

#### 3.1 目的

本研究では、コーパスを用いて「たぶん」「おそらく」が出現する場であるレジスターと、文章の話題や分野を示すジャンルにおける分布の異なりを明らかにする。また、同じレジスターであっても、ジャンルが異なれば使用される語や表現は異なるため、2語が出現する文章の違いについても調査し、その使用傾向を明らかにする。

#### 3.2 データと方法

本調査のために使用したデータは、国立国語研究所が2011年に構築した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)である。BCCWJは13のサブコーパスからなっているが、本研究では、「出版・書籍」「図書館・書籍」「特定目的・ベストセラー」を同じ「書籍」とみなして一つにまとめ、「書籍」「雑誌」「新聞」「白書」「広報紙」「法律」「国会会議録」「教科書」「韻文」「Yahoo!知恵袋」(以下、知恵袋)「Yahoo!ブログ」(以下、ブログ)の11のサブコーパスとし、これをレジスターとみなして分析することとする。検索にはBCCWJ

の検索用 Web インターフェースツールであるコーパス検索アプリケーション『中納言』<sup>1</sup>を使用し、採取できた「たぶん」<sup>2</sup>の用例 7589<sup>3</sup>、「おそらく」<sup>4</sup>の用例 7846 を分析対象とした。また、実際の用例の分析のために、「出版・書籍」サブコーパスから 300 例ずつランダムサンプリングし、分析することとした。

#### 4. 調査結果と考察

##### 4.1 サブコーパス別の出現頻度

各サブコーパスの 100 万語あたりの頻度をグラフ 1 に示した。100 万語あたりの頻度を示したのは、各サブコーパスの母数が異なるため、素頻度だけではサブコーパス間の比較ができないためである。

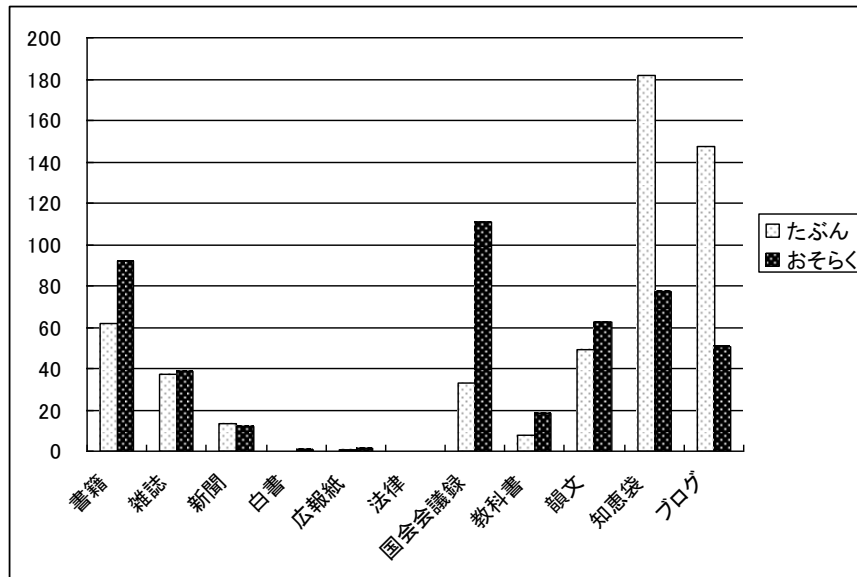


表1 サブコーパス別 100万語あたりの頻度の比較

100 万語あたりの頻度は、「たぶん」72.3 語、「おそらく」74.8 語と同程度の出現であった。しかし、サブコーパス別にみると、出現の偏りが観察された。

まず、「たぶん」と「恐らく」の出現比率を比べた場合、「たぶん」の出現が多いレジスターは、「知恵袋」と「ブログ」であった。「知恵袋」と「ブログ」は出版された印刷物とは異なり、一般の人が自由にインターネットに書き込んでいるものである。これらは、丁寧体で書かれる傾向があり、読み手への意識、配慮が現れる。「書き手と読み手という相互

<sup>1</sup> <https://chunagon.ninjal.ac.jp/login>

<sup>2</sup> 検索式は次の通りである。キー: (語彙素 = "多分" AND 品詞 LIKE "副詞%") WITH OPTIONS unit="1" AND tglWords="30" AND tglKugiri="" AND tglFixVariable="2"

<sup>3</sup> 1 の検索式により 7899 の用例が採取されたが、目視確認の結果、「多分に」が含まれていた。本研究では陳述副詞「たぶん」のみが対象であるため対象外として除外した。

<sup>4</sup> 検索式は次の通りである。キー: (語彙素 = "恐らく" AND 品詞 LIKE "副詞%") WITH OPTIONS unit="1" AND tglWords="30" AND tglKugiri="" AND tglFixVariable="2"

交渉の場という意味で「会話」の一種とみなすことができる」という指摘もされている（秋月 2007）。また、書き手の主観、意志を表す文も多い（渡辺 2007）。

一方、2語の出現比率を比べた場合、「おそらく」の出現が最も多かったのは「国会会議録」で、次いで「書籍」「教科書」「韻文」であった。この4つのレジスターは、「書籍」「教科書」「韻文」と、「国会会議録」の2つに分類できる。まず、「書籍」「教科書」「韻文」は、書き言葉的であり、書き手が読み手を意識して執筆したという点で同じグループとした。そして、このグループの「書籍」は、ホドシチェク他（2010）の分類によると、書かれる目的としては「述べる、娯乐的、自己開示的」、事実性に関しては「意見、思想、創作、事実」となっている。また、「教科書」はその目的としては「伝達的一情報提供、解説、解釈、描写、物語る、手続き」があり、事実性に関しては「事実とその解釈（仮説的）」であるという分類がされている。一方、「国会会議録」は、「書籍」「教科書」とは異なり、国会での質疑応答の記録で、ある程度の修正・削除が行われているものの、話し言葉の特徴が見られるものである。国会での発話は公的な場で行われていること、話者の目の前に相手がいるという条件により、場や聞き手への改まりが言語に現れている。また、断定的な発話を回避するストラテジーが現れた言語表現となっているという特徴も挙げられる。

「たぶん」「おそらく」の出現に大きな差がなかったのは、「雑誌」と「新聞」である。雑誌や新聞は、その目的は「報道、解説、説得、娯乐的」と多様であり、また、ニュースなどの事実を述べる文章から評論文、主張を述べる文章、エッセイなど様々なタイプの文章で構成されている。その特徴ゆえに単純に比較することは難しいが、採取された用例をみるとジャンルや文章のタイプによって違いが観察された。「雑誌」では、「たぶん」(66.4%)「おそらく」(63.1%)と約6割が「総合」<sup>5</sup>のジャンルで使用されていた。最も多く出現していたのは「総合/一般」であったが、その下位分類をみると2語の出現に偏りがみられた。「たぶん」の用例は「女性週刊誌」が10.9%、「婦人誌」が26.1%で、それぞれ「おそらく」の約3倍であった。一方、「おそらく」の用例で多かったジャンルは「総合誌」<sup>6</sup>(26.2%)で、「たぶん」の約2倍であった。「新聞」においては、「たぶん」は用例の6割以上が小説やエッセイで占められていたが、「おそらく」は3割であった。また、「おそらく」の用例の3割が時事問題を扱った文章であったが、「たぶん」は5%しかなかった。

残りの「白書」と「広報紙」では、2語の出現そのものが少なかった。そして、「法律」ではまったく採取されなかった。これらは、国や自治体が発行する公的な文書、統計の報告、厳密な定義がされる法律にかかわるものであることを考えると、そもそも推量の文が出現することが少ない。実際、採取された用例をみると、白書には「たぶん」はまったく

<sup>5</sup> 「総合」は、その下位分類として「一般」「スポーツ」「レジャー」「家庭」「娯楽」「児童」「総記」がある。

<sup>6</sup> 「総合誌」として収められているのは『論座』『現代』『中央公論』など、政治・経済・社会・文化全般についての評論を掲載している雑誌である。

出現していない。「広報紙」にはわずかだが「たぶん」が出現していたが、それはくだけた文体のエッセイと思われる文章であった。

以上の結果から、次のような傾向が明らかになった。

「たぶん」が出現するのは、私的な場における話し言葉の要素の強いレジスターである。また、文章のタイプとしてはくだけた文体のエッセイに、ジャンルとしては「雑誌」に関して言えば、「総合/一般」の中の女性誌等に出現していた。このことから「たぶん」は、私的な場や日常的な話題で使用されると言える。

一方、「おそらく」は2つのレジスターに分類される。まず、解説文や論説文、あるいは、公的な文書など編集、校閲などを経て客観的に記述された文章のレジスターである。もう一つは、公的な場における話し言葉の要素の見られるレジスターである。これらのことから「おそらく」は、客観的な記述が求められる文章と、聞き手に対する改まりが必要な公的な場において使用されることがわかった。

#### 4.2 「出版・書籍」サブコーパス

本節では「書籍」サブコーパスにおける「たぶん」「おそらく」の使用傾向について述べる。「書籍」「新聞」「雑誌」は様々なジャンル、タイプの文章が収められており、均質のデータとはいえない。実際の使用傾向を観察するには、それらを分類する必要があるが、統一した基準を定めるのは容易ではない。そこで、「出版・書籍」内のデータを分析の対象とした。それは、分析の指標として BCCWJ の「出版・書籍」に付与されている日本十進分類法 (NDC) を利用して、ジャンルごとの比較が可能であるためである。

各ジャンルの母数が異なるため、NDC 別の 100 万語あたりの頻度に換算した。ジャンル別に比較したものをグラフ 2 に示した。

サブコーパス別の比較で、「書籍」は「たぶん」より「おそらく」のほうが多く出現していたが、NDC 別でも「0.総記」と「9.文学」を除き、「おそらく」のほうが多く出現している。なかでも「1.哲学」「2.歴史」は3倍、「3.社会科学」「4.自然科学」「8.言語」では2倍の差がみられた。これらのジャンルに分類されている書物は、書き手の考えや論を展開する文章、または説明・解説をした文章である。そのような文章は読み手に納得させるために客観的に書く、もしくはそれを装う必要がある。この出現傾向から考えても「おそらく」は客観的な文章に使用されると言えよう。

他のレジスターと異なる傾向を示した「0.総記」「9.文学」についてであるが、「0.総記」には、逐次刊行物、ジャーナリズム、全集、小説など様々な文章が収められており、「9.文学」と同様に会話の文が含まれている。つまり、この2つのサブコーパスは、会話の文による影響を受けた結果、他のサブコーパスとは異なる傾向を示していると考えられる。

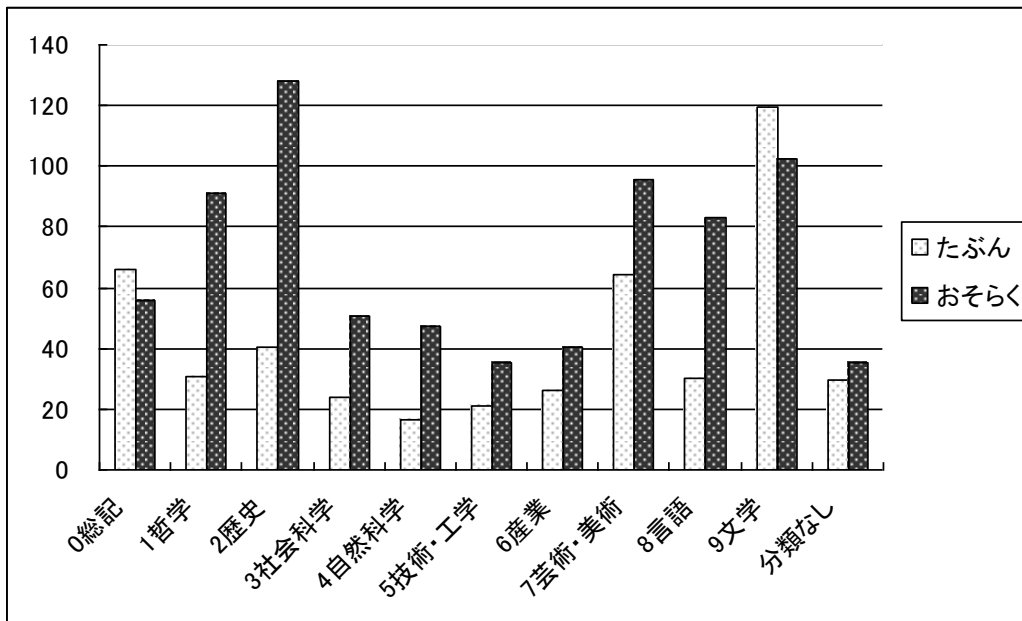


表 2 NDC 別 100 万語あたりの頻度の比較

#### 4.3 「たぶん」「おそらく」の使用傾向

これまでサブコーパス内での出現傾向を観察したが、語の使用をみるには、用例を分析する必要がある。本調査では「出版・書籍」から 300 例をランダムサンプリング<sup>7</sup>したものを分析することとした。分析する範囲としては「0.総記」から「8.言語」とした。「9.文学」は地の文と会話文が混在した小説類が分類されているため、本調査の対象外とした。

まず、調査対象語が以下の3つの文体の文章のいずれに現れているのかを調査した。

- 丁寧体：基本的に地の文が「です・ます」体で書かれた文章
- 普通体：基本的に地の文が「だ・である」体で書かれた文章
- くれた文体：普通体，丁寧体のいずれかであるが，会話やくれた表現がある文章

分析した結果を，グラフ 3<sup>8</sup>に示した。

300 例の用例のうち普通体の割合が最も多かった。しかし、「おそらく」のほうが普通体での出現が多い。特に解説文，説明文などに多くみられた。丁寧体の割合は2語とも同程度で，読み手を意識して丁寧に考えを述べている。くれた文体は「たぶん」のほうが多く，自らの考えや体験を読み手に対して語りかけるような文章であった。

次節では，実際にどのような文に現れていたのか，各々の特徴を述べる。

<sup>7</sup> 該当用例全部をリストアップし，RAND 関数で乱数を発生させ，300 例を抽出した。

<sup>8</sup> グラフ内のラベル「-」は，文体が判断できなかったものである。分析したデータはキーの前 30 語までの文脈で，一文が完結していないものもあったためである。

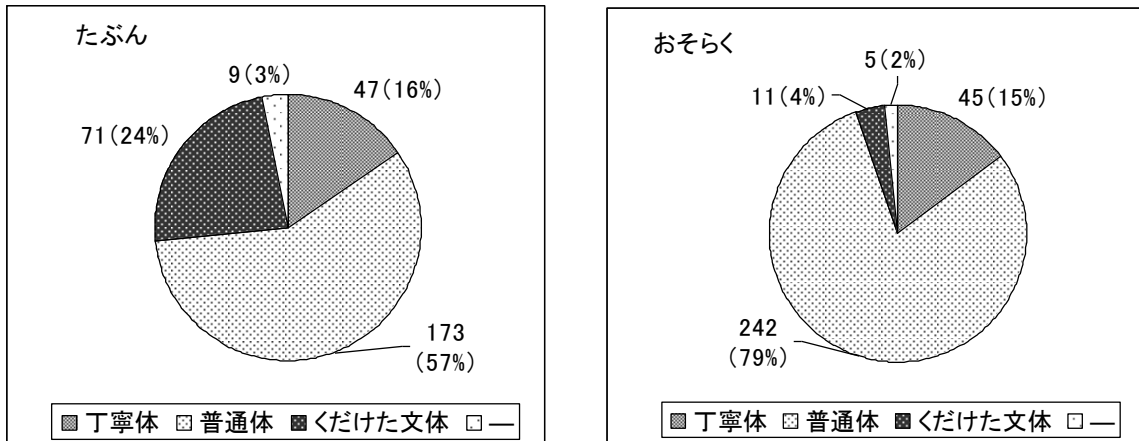


表3 語が出現する文体

#### 4.3.1 「たぶん」

「たぶん」が使用されている文の特徴を述べる。用例の後ろの英数字は、BCCWJのサンプルにつけられたサンプルIDである。

##### ア. 会話，対談，モノローグ的な文章の中での使用

小説の中の会話，インタビューや対談を書き起こしたもの，また，自らの体験や考えを語っている文章に多く現れていた。

- (1) …夫がカメラを向けた。とたんに暗闇の中だ。「撮れたの?」「多分，撮れたと思うよ」樗平で溪谷へ，私の足もとを気遣いながら，… (PB50\_00056)
- (2) 桜庭 ルールはバーリ・トゥードですよ。でも昔のUインターのイメージもあるし…。でも，多分そういうUインターのイメージの試合にはならないと思います (笑)。  
高山 ならないでしょう，それは。 (PB37\_00007)
- (3) もし私が平和な社会状態と，平和な政治的環境のもとに生きていたとしたら，多分私は学者になっていただろう— (PB32\_00122)

##### イ. 独立した使用，文末，( )の中に挿入した使用

文中に挿入する，単独で使用するなど話し言葉的な使用が見られた。

- (4) …どうしてもうまくいかなかったら西寧に戻ります」「そんな簡単に中国へ戻るの?」「たぶん…。ここで政治的な運動をしなければ大丈夫と思います。」 (PB32\_00122)
- (5) 小さいうちは「怖い」ということがあまりわかっていなかったものでよく高いところへのぼった。(たぶん)小学二年生の夏休み，電柱にのぼって伯母に叱られた。 (PB54\_00177)



ウ. 文中における一人称との共起

「私」「僕」「私たち」などとの共起は、300 例中 17 例<sup>9</sup>あった。また、「俺」「あたし」などくだけた語が使用されていた。「私たち」の複数形は 2 例で、単数での使用が多い。

(6) 伊藤 『彼氏がさりげなく自分の荷物を持ってくれた時』。これはたぶん、俺が女だったらうれしいですね。さりげなくっていうのがポイント。(PB37\_00020)

(7) 私<sup>9</sup>は、いまから、たぶん、『礼拝堂再生』よりも長い時間をかけて『琴平山再生計画』に取り組むことになるだろう。(PB37\_00058)

エ. 「思う」との共起

書き手の主観的な考えを述べる際に使われる「思う」との共起が 58 例あり、「おそらく」の 21 例と比較して目立ったことが挙げられる。

「たぶん」は、前述したように会話文での使用、「たぶん」一語での使用が多くみられることから口語的な特徴を持つ文で使用されることがわかる。また、一人称単数との共起、「思う」という書き手の主観が表現される語との共起から、書き手本人の主観的な推量を述べる際に使用されるということも明らかになった。

#### 4.3.2 「おそらく」

「おそらく」の特徴としては、以下の点が挙げられる。

ア. 会話文での使用の少なさ

事象、出来事、事物に対する推量の文としての使用が多かった。引用符号で囲まれている場合も、会話ではなく、引用に用いられていた。

(8) 反対仮説を具体的に提示していない。判例がこのような表現ですませたのは、おそらく第 1 の理由が存在するためであろう。(PB33\_00194)

(9) 目の先に小さな石が置かれているのに気づいた。その石はおそらく簡易な墓標なのだろう。バラの花が手向けられていた。(PB47\_00229)

イ. 独立した使用、文末、( ) の中に挿入した使用の少なさ

「たぶん」のような独立した使用、文末での使用はなかった。( ) 内での使用も、「(おそらく)」という単独での使用は 1 例のみで、「おそらく」の含まれる文が( )でくくられているという使用がわずかに採取された。

(10) 一括操作は、Collection 全体に対して一度に操作を遂行します。これ

<sup>9</sup> 文末と呼応している用例で、同一文中に共起していたのは 28 例である。

らの一括操作は、(おそらく効率は落ちますが) 前述の基本操作を使ってもシミュレートできます。(PB10\_00073)

- (11) 実際にその場に立ち会った民衆の数はかぎられていたはずであり、これほどの大英断と(おそらく)巨費を投じて敢行した一大デモンストレーションを、限られた数の民衆の脳裏にのみとどめる…(PB12\_00332)

#### ウ. 文中における一人称との共起

「たぶん」と同様に一人称と共起した文が8例<sup>10</sup>あった。しかし、「おそらく」の場合は、一人称単数は2例のみで、「私たち」「われわれ」の複数での使用のほうが多く見られた。「われわれ」は「おそらく」のみに出現している。そして、「たぶん」に出現していた「俺」「あたし」のようなくだけた語は現れていなかった。また、限られた用例数であり、断定することはできないが、一人称は「おそらく」よりも後に出現する傾向がみられた。

- (12) 大企業では社内組織、関連会社の位置づけ、さらには系列関係までも見直しの対象となる。これが恐らくIT革命の本筋のシナリオになる、とわれわれは推測している。(PB13\_00021)

- (13) そして、おそらく私たちのどちらもが英語を理解するので、言葉を聞かなければなりません。(PB31\_00058)

#### エ. 「であろう」「思われる」との共起

「であろう」との共起が300例中41例あった。「たぶん」では10例であり、4倍の差がある。また、「思われる」は14例あり、「たぶん」の5例の約3倍の差がある。

以上の使用傾向から、「おそらく」は、書き言葉においては、単独、または文末での使用があまりみられず、話し言葉的な要素が弱いと言える。そして、一人称複数との共起、文末表現「思われる」「であろう」との共起などから、考えを客観的にまた慎重に提示する文章に使用されることが明らかになった。

## 5. まとめ

本稿では、BCCWJから「たぶん」「であろう」の出現するレジスターとその使用傾向を明らかにした。

全データにおいて「たぶん」「おそらく」の出現頻度は100万語あたり約70語と、同程度であったが、サブコーパス別にみると、偏りがみられた。「たぶん」は、話し言葉的な文章である「知恵袋」「ブログ」で多く出現していた。そして、「おそらく」は、公的な場に

---

<sup>10</sup> 文末と呼応している用例数で、同一文中に共起していたのは15例である。

おける話し言葉の記録である「国会会議録」と、編集、校閲などを経て、客観的に記述されている「書籍」「教科書」「韻文」での出現が多かった。また、「出版・書籍」サブコーパス内での使用傾向をみると、「0.総記」「9.文学」をのぞいて「おそらく」のほうが多く出現しており、特に解説文や説明文などに多く使用されていることが明らかになった。そして、「たぶん」「おそらく」の用例の分析からは、「たぶん」には話し言葉的な特徴があり、書き手の主観的な推量に用いられていること、「おそらく」は、文章における使用では話し言葉的な要素は少なく、考えを客観的に述べる際に用いられるという傾向がみられた。

以上のことから、「たぶん」「おそらく」の使用傾向について以下のようにまとめることができる。

#### 「たぶん」

- 書き手自身の主観的な判断に基づく推量を表す。
- 話し言葉的な要素が強い。
- 私的な場においてなされる話題、個人的なこと、日常的な内容であることが多い。
- 会話的な文章、個人的な考えを述べる文章に多く使用される。

#### 「おそらく」

- 基本的には書き手、あるいは他者を含めた主観的な判断に基づく推量を表す。
- 書き言葉では、話し言葉的な要素は少ない。
- 説明文、解説文など、客観的であることを求められる文章に使用される。
- 話し言葉では、公的な場における他者への改まり、丁寧さが必要な場に使われる。

## 6. 今後の課題

本稿では、BCCWJのサブコーパスを一つのレジスターとみなして分析を行った。しかしながら、各サブコーパスには様々な文章が含まれているため、厳密な文章のジャンルごとの分析とはなっていない。また、「たぶん」「おそらく」は陳述副詞であり、語の使用を考えると、文末との呼応関係のさらなる分析も求められる。今後は、文章のレジスターやジャンルを均質に整えたうえで、その中における語の文体的特徴を明らかにしていきたい。

## 参考文献

- 秋月高太郎 (2007) 「ブログに書かれること、書かれないこと—ブログ「会話」の含意—」『日本語学 特集ブログのことば』4月号第26巻第4号 pp.46-56
- 柏野和佳子, 奥村学 (2012) 「書籍テキストへの分類指標人手付与の試み—『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の収録書籍を対象に—」言語処理学会第18回年次大会発表論集 pp.1260-1263

- 北原保雄（2002）『明鏡国語辞典』大修館書店
- 高橋雄一（2008）「上級の論述文における話し言葉の誤用とその出現環境について―「読み手めあての表現」を中心に―」『日本語研究教育年報 12』東京外国語大学, pp.101-113
- 飛田良文, 浅田秀子（1994）『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 中村明（2011）『語感の辞典』岩波書店
- 日本語教育学会編（2005）『新版日本語教育辞典』大修館書店
- 林巨樹（1977）「文章のジャンル」『現代作文講座 1 文章とは何か』明治書院
- ホドシチェク・ボル, 仁科喜久子, ベケシュ・アンドレイ（2010）「レジスターに基づく日本語のモダリティ形式の分類」『「日本語コーパス」平成 21 年度公開ワークショップ予稿集』pp.251-256
- 前坊香菜子（2011）「雑誌コラムに現れる語彙とモダリティ―副詞と文末表現を中心に―」『電子情報通信学会技術研究報告』TL2011-7 vol. 111 No. 98 pp. 37-42
- 宮島達夫（1972）『動詞の意味・用法の記述的研究』「国立国語研究所報告 43」秀英出版
- 宮島達夫（1977）「単語の文体的特徴」『村松明教授還暦記念 国語学と国語史』明治書院 pp.871-903
- 渡辺文生（2007）「ブログの言葉遣い」『日本語学 特集ブログのことば』4月号第 26 巻第 4 号 pp.26-33